

上映映画解説

1957, 6~7

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー

No. 48

人生のお荷物

「人生のお荷物」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、特別鑑賞会の第二八回として、六月一六日から七月一四日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）五所平之助監督の松竹映画「人生のお荷物」を上映します。

人生のお荷物

松竹蒲田一九三五年作品

スタッフ

脚本	伏見 晃
監督	五所平之助
撮影	小原 譲治
録音	土橋 晴夫
音楽	堀内 敬三

キャスト

福島省三	斎藤 達雄
妻 たま子	吉川 満子
倅 寛一	葉山 正雄
長女 高子	坪内 美子
高子の夫小見山	大山 健二
次女 逸子	田中 絹代
逸子の夫黒田	小林十九二
三女 町子	水島 光代
橋本中尉	佐分利 信
阿部福太郎	新井 淳
妻 おかね	飯田 蝶子
女中お浪	六郷 清子
その他、水島亮太郎、坂本武、突貫小僧、爆弾小僧、三宅邦子、小桜葉子など	

解説

この映画は、「マダムと女房」によって、日本ではじめてのトーキー映画に成功した五所平之助が、昭和一〇年に監督した作品で、同年十二月一〇日に、浅草帝國館、丸の内、麻布、新宿の松竹劇場で封切され、同年

度キネマ旬報ベスト・テンで第六位となりました。いわゆる小市民映画の一つで、小津安二郎とは違ったスケッチ風の情緒を見せた佳作です。

主演の斎藤達雄氏は、この映画を見て、その感想と当時の思い出を次のように語っています。

「とりあげている題材にもよるのですが、二十年間の時期的なズレを余り感しませんでした。テンポの点を心配してはいたんですが、現在のものとそう違わないようです。例えば最近の「道」よりむしろテンポが早いんじゃないでしょうか。劇中ラジオの職業紹介でのり屋の店員の月給が三円五十銭とか言っていましたね。そういう時代でした。当時三才の私が五九才の役を演じた訳です。演技の未熟さに対する不満は沢山ありますが、ツケヒゲを鍋の中に落したり、坐っている膝の上へ重いマイクをのせられて閉口したり、新聞社から演技賞を貰ったり、懐かしい思い出ばかりです。

私は以前から、サイレント的な効果のかもしれない出ず舞閉気が、映画の本質的な問題として非常に重要な要素であるという説もっているのです。エリア・カザンのもので「道」などでもサイレント的な手法がはつきり出ています。この映画では、サイレントの影響をぬけ切れないといった方が当たっているでしょうが、サイレントを知らない今の若い映画人たちが今日改めてサイレントを勉強しようとする場合、いろいろ参考になると思います。日本映画の文法というか、松竹映画に代表される現代劇のスタイルとかムードというものが非常によく出ていると思います。（談話筆記）

「人生のお荷物」の頃

清水 晶

「人生のお荷物」が封切られたのは、今から二十二年前の昭和十年の暮、私が頭に二本の白線をいただく高校生（旧制）時代だった。そのときは評判を聞いただけでつい見逃してしまい、実際にこの映画を見たの

は、それから少しして、大学に入ってから、たしか京都の旅先で、一日がわりの日本映画の名画週間が行われたときだったと記憶している。当時は、今のように入試で見るのと違って、多くもない小遣の大部分を映画館の窓口で借しげもなく捧げて、一本でも余計に映画を見た、我が生涯を通じての最も狂熱的な映画青年期だった。

後世の歴史と照らし合わせて考えれば、その頃は、わが日華事変前夜、日本のファッショニズムがひたすら自滅の刃を研いでいたことになるが、一般的には勿論まだ敗戦とか物資の窮乏とかいうことなどは全く念頭になくて、結構気楽に親のすねをかじって映画ばかり見ていられた、時代だった。

そしてまた、この「人生のお荷物」が現れた頃は、日本映画全体の歩みの上からも、実によき青春時代だった……と思うのは、あなたがち私自身の「グッド・オールド・デイズ」と結びついている個人的な感懐ばかりではあるまい。昭和六年の「マダムと女房」を口火に、日本映画が無声映画からトーキーへの果敢な脱皮を試み始めてからすでに数年、昭和九年頃はそれでもまだ小津安二郎の「浮草物語」を初めとして、無声映画独特の味わいに未練を感じさせる何かを尾を引いていたが、昭和十年になると、すっかりトーキー時代に入り、昭和十一年に至って、溝口健二の「浪華悲歌」「祇園の姉妹」「内田吐夢の「人生劇場」などの傑作の続出に、飛躍的な発展を遂げることになるのだが、「人生のお荷物」はそうしたいわば日本のトーキーの、さわやかな朝ぼらけの時代の産物だった。これがもう二、三年すると「五人の斥候兵」「上海陸戦隊」「土と兵隊」などというのが幅をきかせて、軍服の匂いが鼻について来るようになる。

「人生のお荷物」が作られた当時の日本映画界は、大別すれば今日と同じ六系統……とはいえないものの、この中、大都と極東の二つは、トーキーなどどこ吹く風と、依然サイレント映画ばかり作って、徹底的な場末目当ての三流、四流の仕事をしてきたこと、今日の

東映がどうのこうのというどこの比ではないから論外として、残る四つの中、新興を二流として、一流は松竹、日活と、東室の前身のPLCの三社。この中で、PLCは創立当初から全作品トーキーを標榜して大いに清新の気に溢れていたが、いかんせん引抜きで廃止したようなものだけに、持駒が少く、作品の教もまだ僅少で、結局、松竹と日活の争いということになっていたわけだが、日活が山中貞雄、稲垣浩を擁して、時代劇中心であったのに対し、松竹は現代劇に重点を置き、最も豊富な監督陣、スター陣を誇っていた。それはちやうど大船に撮影所の竣工を見る直前で、大正中期以来のなつかしい呼び名である松竹蒲田の名残の年であったが、そこには島津保次郎、清水宏、五所平之助、小津安二郎などが代る代る自作を、スト・テンに通るだけの精進おさおさ怠りなく、田中絹代を筆頭に、川崎弘子、及川道子クラスの中堅スターから、高杉早苗、桑野通子、三宅邦子などの新進の名花がずらりと咲き揃って、他社の垂涎の的となっていた。まさに松竹の黄金時代である。やがてこゝから、及川通子が若くしてこの世を去った代りに、高峰三枝子、水戸光子が新たにスターの中に加わって来て、一層の華やかさを増した。男優では上原謙、佐分利信、佐野周二が二枚目三羽鳥として文字通り若さを誇っていた時代である。藤野秀夫、上山草人、河村黎吉、斎藤達雄、飯田蝶子、吉川満子、岡村文子などのバイ・プレイヤー陣も他社に較べて断然腕達者が揃っていた。

そうした我が世の春を謳歌する松竹の「お花畑」の中にあつて、五所平之助はすでに押しも押されぬ一流監督だった。無声映画時代に早くも「からくり娘」「村の花嫁」などの名作を連続し、「マダムと女房」では日本映画史上忘れてはならないトーキーの露払いの役をつとめ、「伊豆の踊り子」「生きとし生けるもの」「左うちわ」などが続いて、この「人生のお荷物」に至り、更にその後には「暈夜の女」のようなしっかりとした作品が続いている。五所さんの肌目の細かい叙情性を云々する上に、この「人生のお荷物」と「伊豆の踊り

子」「暈夜の女」の三つはけだし代表的なものであろう。そのあと、彼の長い闘病生活が訪れ、その間に「木石」「新雪」などをはさんで戦後にリレーする。私は何かの機会に、五所さんのことをまるで年を逆にとつて行くようだと書いたことがあるが、戦後間もなくの「今ひとたびの」の徹底した耽美主義から東宝争議で赤旗を振ったとか振らないとか喚され、その後独立プロで椎名麟三のものと取組むなど、老いてますます野心満々の五所さんに較べると、戦前の松竹時代の五所さんは、早く円熟して、自分だけの世界を丹念に磨きに磨き今よりはるかに枯れた、一種の完成した感じだった。

そしてまた、この「人生のお荷物」の当時は、現代劇ならば、ルーティンをなぞるメロドラマか、技功だけで見せる青春喜劇の類が氾濫する中に交って、芸術的な良心作といえば小市民映画と判に捺したようにきまっていた。これももつと、分析すれば、昭和の初期に吹きまわった左翼旋風が鎮圧されて、日活から内田吐夢の「裸の町」や熊谷久虎の「蒼眠」のような社会的現実を直視する新しいリアリズムが打ち出される以前の、詠歎的なリアリズムがサラリーマンその他のささやかな小市民の経済生活の明暗の上に僅かに社会的関心を寄せるところから生まれたものだった。

そうした意味の「良心的な」小市民描写と五所平之助の練達した「叙情」の合体の一つの頂点が「人生のお荷物」である。二十年以上たった今、この映画がどんな印象を与えるか、殊にテンポとか、演出様式とかいう点で現在の眼にどんな風に映るか、これをたしかめてから、実はこの一文を書きたかったのだが、いつもながら、その機会を与えられないで、昔の想い出だけをたよりに、筆を執らなければならなかった。だが、考えようによっては、私の青春の想い出を、今もう一度見直して、もし色あせたら………と思うとこのまますっと見ないで置きたい気持もしないではない。ともあれ、映画の結びは淋しく暗くとも、あくしたことを淋しがっていられただけ、あの頃はのびやかなよき時代だった。